

わがまち歴史散歩

北摂太平記

「要害」としての
西国街道

『太平記』は14世紀の鎌倉幕府倒幕運動から建武新政、南北朝内乱を描いた軍記物語です。この時代は中央から地方に至るまで各階層で対立関係が表出し、全国各地で戦争が繰り広げられました。日本列島を縦横に軍勢が移動し、戦術面では「要害」と呼ばれる峻険な城郭や交通の要衝が焦点となりました。その要害の一つが京都と西国を結ぶ西国街道(ほぼ現・国道171号に相当)で、池田市域近辺でも時に戦局を左右する戦闘が行われました。

元弘3(1333)年、後醍醐天皇による倒幕のげきに呼応した播磨国佐用荘(上郡町)の赤松円心に対して六波羅探題軍が発向、摩耶城(神戸市)・酒部(尼崎市)・瀬川(箕面市)で交戦しました。瀬川合戦に勝利し京都侵攻を試みる円心を討つべく幕府軍を率いた足利尊氏は、幕府を裏切り六波羅探題を滅ぼしました。鎌倉では新田義貞の活躍で幕府が滅亡し、後醍醐は建武新政を開始します。人々の期待を背負った建武新

政でしたが、武士たちを中心に不満が渦巻きました。建武2(1335)年に幕府残党の北条時行(最後の得宗・高時次男。漫画『逃げ上手の若君』主人公)が蜂起すると尊氏はこれを鎮圧し、鎌倉に居座って政權離反を鮮明にします。尊氏は後醍醐が差し向けた義貞・北畠顕家などの追討軍と交戦しつつ、鎌倉から京都そして博多へと転戦し、翌年に再び上洛して光明天皇を擁立します。光明に三種の神器を奪われた後醍醐は吉野に逃れ、ここに南北朝の対立が始まります。



『池田市名所絵葉書』より豊島河原合戦が行われた箕面川(井口堂付近)
(歴史民俗資料館所蔵)

尊氏が博多へ没落するきっかけは、箕面川を挟んだ豊島河原合戦での敗戦でした。義貞と対峙した尊氏の弟・直義は楠木正成の夜襲に遭い、戦わずして兵庫に逃れ海路、九州へ向かいます。九州で態勢を立て直した尊氏は京都をめざして湊川(神戸市)で正成を撃破、呉庭荘(宇保町)でも合戦が行われました。

池田氏の登場

室町期に池田を中心に勢力を張った国人・池田氏と池田城は、この呉庭合戦から歴史の表舞台に登場してきます(池田氏については「市史編纂だより」第47・50回参照)。摂津国御家人の芥川岡国茂は足利方の国大将・仁義有に属して呉庭合戦に参戦し、「池田城」に数日間こもって夜詰めに当たっていました(平国茂軍忠状)。この岡氏とともに「池田殿」の名が14世紀初めの勝尾寺(箕面市)の檀那として挙がっており(「勝尾寺文書」)、既に池田氏は北摂地域の有力者であった可能性がうかがえます。

池田氏の存在が史料上明確になるのは、貞治2(1363)

年の將軍足利義詮(尊氏子息)御判御教書です。ここでは池田親政が興福寺領の摂津国賀茂村(川西市)領家職の半済分を預け置かれた事実が認定されています。半済とは、公家や寺社の所領もしくは年貢の半分を、兵糧料所・兵糧米として軍勢に割り当てる室町幕府の軍事政策です。したがって池田氏は幕府に属し、南北朝内乱を戦う中で成長していったのです。



発掘中の池田城跡主郭遠景(平成2年ごろ)

(市史編纂委員会委員・松永和浩)
問合せ 歴史民俗資料館

☎751・3019

わがまち歴史散歩

池田の植木業—果樹と苗木

池田周辺のブランド

北摂地域では池田の盆栽や木部の牡丹^{ぼたん}が有名です。しかし他にも江戸から明治時代にかけて、この地域でブランド化した果樹・苗木があります。「池田苗」は細河で産出する苗木のブランド名です。また、「池田荷物」もありました。この地域の米・酒・鉱物（多田の銀・銅）のほか、4～9月は果物類が中心で、毎日大坂天満方面に出荷されたといえます。この果樹は池田村で産出したものです。

池田村の果樹栽培

池田村の古文書に元禄13（1700）年と天保13（1842）年に果樹畑を調査した帳面が残っています。これを比較すると畑地の面積はどちらも八町三反七畝余。栽培する果物も元禄にはミカン・カキ・スモモ・ウメ・ビワ・ナツメ・アンズ・リンゴがあり、天保年間にクリが加わるだけです。このように17世紀の末には果樹畑の面積・栽培種ともに開発は限界に来ているようです。

しかし経営のあり方は大きく変化しています。元禄の段階で

は20人が畑地を所有しています。帳面には畑地の所有者ごとに記載されています。ところが

天保ごろには畑地の所有者が増加しています。そのため帳面の記載方法も畑一筆ごとに人名と果樹の種類を記載するように変化しています。天保ごろにはおそらく畑地と果樹を所有する人と、実際に果樹の世話や収穫を行う人は分離していたのではないのでしょうか。池田村の住人が所有権を持つ果樹園を近隣の農家が経営し、何らかの形で利益を分配していたと考えられます。

細河の苗木栽培

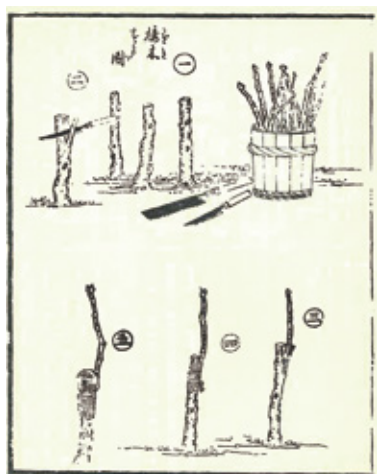
細河では接ぎ木による植木・苗木栽培が始まりました。元禄14（1701）年刊行の『摂陽群談』や、幕末の『広益国産考』には果樹の解説や細河の植木について紹介しています。そうした書物などによると細

郷谷（細河）の住民が「樹を撓^{とが}接^つの術」（接ぎ木の技術）を習得し、樹木（植木）を育て、大坂天満の植木屋に出荷すると記されています。接ぎ木による植木栽培は近隣の加茂村（川西

市）や山本村（宝塚市）でも見られました。

東山柿には扁平な大和柿（五所柿）と細長い形の久保柿があり、どちらも大ぶりの実が成ります。また、商品としてのカキは渋柿（柿渋の原料）にせよ甘柿にせよ、大ぶりのカキの実を作るには接ぎ木栽培が必須だったとのことです。角之坊栗は伏尾村産の大ぶりのクリです。なお、クリの用途として材木を採る場合は実を播^まげばよいのですが、クリの実を収穫するなら接ぎ木栽培でなければならなかったようです。

このほか、北摂では商品作物用の苗木を栽培し各地に出荷しています。幕末ごろの北摂の果物植木としてミカン、コウゾ、ウメが挙げられています。紀州ではミカンの産地は苗木を栽培せ



「接木する図」（『広益国産考』より）

ず、摂津の東野村（伊丹市）から取り寄せています。梅干しの原料となるウメの苗木も東野村から取り寄せています。北摂ではミカンの苗木も接ぎ木で育てました。ウメの用途は観賞用と梅干し用があり、観賞用のウメは木部で植木を育て全国に出荷しました。この苗木も接ぎ木で育てたものです。また和紙の原料となるコウゾも優良な苗木が選ばれました。木部では赤楮・黒楮・真楮・高楮といったさまざまなコウゾの苗木を作り、九州・中国・四国地方に出荷しました。

このように接ぎ木の技術によって、池田・細河など北摂地域は果実・苗木におけるブランド化に成功したのです。



細河での接ぎ木の様子

（市史編纂委員会委員・野高宏之）
問合せ 歴史民俗資料館

☎751・3019